

特集にあたって

——これから、子どもの環境をつくっていく人たちへのメッセージ——

「子ども未来学研究」編集長 杉山直子

私たちのまわりの様々な環境は、この半世紀で大きく変化した。こうした表現は、現在いたるところで、もっともらしく用いられている。しかし、こうした表現を実感とともに用いるには、ある程度の経験と年齢が必要なようである。ようやくその域に入ってきた私である。20代半ばまでの私は、ある地域と学校への所属という狭い世界から、論理的な観点を「学ぶこと」で世界を覗こうとしていた。気付き見えた環境やものごとのとらえ方は一方的であり、その変化は便利な物が増えることぐらいであったり、様々な環境の中で生をつむいでいる現実の人たちのことを知る由もなかった。今思えば、そのぐらいしか気付きみえる力がなかった。そして30代から、少しずつみえるようになってきたのは、当事者としての自分がかかわる世界の広がりがあったからだ。例えば、自分とは異なる環境で暮らしてきた人たちとのかかわり、一人の人間の誕生から人格ができつつある過程への母親としてのかかわり、他の子どもとその育つ過程や保護者や保育者・教師とのかかわり、子どもから大人に変わろうと模索する時期である学生との大学教員としてのかかわりや、私自身の母親の親・妻・祖母・姑・高齢者という立場と変化を身近に見る娘としてのかかわりなど、身近な様々な人たちのまさしく「生」とのかかわりを通して、様々な環境の変化の事実を知ることとなる。それは、自然、人、もの、ことば、文化など…と、それらのとらえ方の変化である。

さらに見えてきたのは、人間の発達と環境の関係性についてである。それは、所与の環境のなかで、いかに生きることが人間として望ましいかを求め、格闘する大切さである。環境に依存し責任転嫁をするのか、環境に働きかけ格闘するのかが発達は大きく異なる。また、格闘の目的により、発達の姿は大きく変わる。例えば、単なる自己の利益や快のためなのか、自分自身の人間としての発達要求の声の解明であるのかが大きく異なる。さらに、自分の所属集団（家庭、学級・学校、職場など）全体を考えた構成員としての役割や社会の一員としての役割を持つ自分をとらえて考えるか否かで、発達の程度は変わる。発達することの意味は、狭い世界から広い世界へ、見える世界から見えない世界への広がり深まりであり、そのことにより自分自身が解放され自由を獲得することである。今の自分の環境に働きかけず、従順でありすぎる人の多さに驚くこともしばしばである。

さて、子どもを取り巻く環境は、半世紀で大きく変わった。それをどのようにとらえ、子どもと環境をかかわらせ、格闘する主体に育てるのが、大人の役割である。以上の観点で、特集に寄稿して下さった先生方の玉稿から多くを読み取ってほしいと願う。